

島根県農業技術センター

5月下旬田植え「コシヒカリ」栽培暦

■ねらい

無効分げつの少ない、すっきりしたイネづくりで乳白粒の発生を抑え、良質・良食味米をつくる

■収量と収量構成要素の目標値

栽植密度 株/㎡	最高茎数 本/㎡	穂数 本/㎡	一穂粒数 粒/穂	粒数 粒/㎡	登熟歩合 %	玄米千粒重 g	10a収量 kg/10a
18.5	420	350	80	28,000	83	22.0	510

月	4 月			5 月			6 月			7 月			8 月			9 月			10 月																																														
日	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬																																													
生育ステージ				播 種 期	出 芽 期	緑 化 期	硬 化 期	田 植 期	活 着 期	分 げ つ 期	終 有 効 止 分 げ つ 期	最 高 分 げ つ 期	幼 穂 形 成 期	出 穂 期			成 熟 期																																																
				種子播種	播種		育苗		活着	有効分げつ		無効分げつ		幼穂形成・穂ばらみ			登熟			調製・出荷																																													
				12cm・2.5葉・3〜4本/株			18〜19本/株			穂数18〜19本/株																																																							
水管理							湛水管理			間断かん水		中干し	走水	間断かん水			湛水管理		落 水																																														
主な作業	土 づ くり			播 種	育 苗	基 肥	育 苗 箱 施 薬	田 植	除 草 剤 散 布	作 中 干 し			穂 肥 ①	穂 肥 ②	病 害 防 除	害 虫 防 除 ①	害 虫 防 除 ②	落 水	収 穫	乾 燥 調 製																																													
主な管理作業の内容	浸種水温は10〜15℃			適切な水管理で生育促進									防除の徹底			適期刈取																																																	
	◎土づくりを心がける ・深耕（30cm深く起こす） ・堆肥等の有機物施用、土づくり肥料の施用			◎健康な苗づくり ・育苗期間の温度管理、かん水に注意する ・浸種時間は積算温度100℃を目安とする ・種子消毒剤は、たばこ温湯消毒による種子消毒を行う									◎基肥は土壌肥力と肥分により調整 ・窒素成分は15〜20kg/10a程度 ・リン成分は10〜15kg/10a程度 ・カリ成分は10〜15kg/10a程度									◎水管理は適切な水管理で生育促進 ・湛水管理は、低温や風雨による地温の低下を抑制し、生育を促進 ・中干しは、生育初期に実施 ・除草剤は、生育初期に散布 ・雑草の発生状況等をみて、適期に除草剤を散布									◎穂肥の時期と量はイネの生育により調整 ・一回目：施用時期は出穂前20〜30日頃、窒素成分は10〜15kg/10aを目安に ・二回目：施用時期は出穂前10〜15日頃、窒素成分は5〜10kg/10aを目安に									◎防除の徹底 ・カメムシ防除二回目（一回目の10日後頃） ・紋枯病防除（穂ばらみ期） ・二回目は、施用時期は出穂前2〜3日頃、窒素成分は10〜15kg/10aを目安に									◎適期刈取りの実施 ・青刈率（10〜15%） ・登熟を促進 ・出穂後2〜5日頃までは間断かん水が続ける									◎適切な乾燥調製を行うこと ・急激な乾燥は避け、ゆっくり乾燥させること ・適正な乾燥は、乾燥機（乾燥機）を使用 ・乾燥機は、乾燥機（乾燥機）を使用 ・乾燥機は、乾燥機（乾燥機）を使用							

「つや姫」栽培ごよみ（特別栽培基準）

主な品種特性

- ①高温登熟性に優れ、高品質である
- ②食味が良い
- ③短粋で倒伏に強い
- ④葉が直立し受光体勢が良い

特別栽培基準

- 化学肥料
総窒素施用量（施肥の目安 5.0kg/10a）のうち
化学肥料の窒素成分量の合計 4kg/10a以下
- 化学合成農薬
節減対象農薬使用回数（成分） 10回以下

◇生育・収量目標と収量構成要素

m ² 当たり植付株数	1株穂数	m ² 当たり穂数	1穂粒数	m ² 当たり粒数	登熟歩合	玄米千粒重	収量(精玄米)
株/m ²	本/株	本/m ²	粒/穂	粒/m ²	%	g	kg/10a
18.5	18.9	350	80	28,000	82	23.0	525

月	3月	4月			5月			6月			7月			8月			9月		
日	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
生育ステージ		出芽期	緑化期	硬化期	田植期	活着期	分けつ期		有効分けつ終止期	最高分けつ期	幼穂形成期			出穂期			成熟期		
水管理					湛水管理			間断かん水			作溝	中干し	走水	間断かん水			湛水管理	間断かん水	落水
主な作業	土づくり	播種	育苗	基肥	育苗箱施薬	田植	除草剤散布		作溝	中干し	穂肥			仕上げ防除			落水	収穫	乾燥調製
主な管理作業の内容	・堆肥等の有機物施用による土づくりを徹底する ◎土づくりを心がける	・育苗期間の温度管理、かん水に注意する ・乾粕一〇g/箱の薄まきに努める ・浸種時間は精製温度一〇〇℃を目安とする ・種子消毒剤または温湯消毒による種子消毒を行う ◎健康な苗づくり	◎基肥の施用 ・地方の高いほ場では窒素成分一kg/一〇a程度減肥する ・地方の低いほ場では窒素成分一kg/一〇a程度増肥する ・窒素成分 三kg/一〇aを目安に	・播え付け株数六十株/坪（株間一八cm・条間三〇cm） ・一株播え付け本数 三〜四本 ・播え付け時期 五月上旬下旬頃 ◎播付けは適正に！	・雑草の発生状況等をみて、適期に除草剤を散布 ◎除草剤の適期散布 ・低温や強風時は深水管理 ・深水管理により地温を高く維持 ◎水管理による初期生育の促進	・根の健全化、無効分けつの発生防止 ・茎数が株当たり二十本程度になったら開始 ◎中干しの実施 ・水管理を効率的かつ効果的に行う ◎作溝の設置	・穂肥の健全化、無効分けつの発生防止 ・茎数が株当たり二十本程度になったら開始 ◎中干しの実施 ・水管理を効率的かつ効果的に行う ◎作溝の設置	・穂肥の健全化、無効分けつの発生防止 ・茎数が株当たり二十本程度になったら開始 ◎中干しの実施 ・水管理を効率的かつ効果的に行う ◎作溝の設置	・穂肥の健全化、無効分けつの発生防止 ・茎数が株当たり二十本程度になったら開始 ◎中干しの実施 ・水管理を効率的かつ効果的に行う ◎作溝の設置	・穂肥の健全化、無効分けつの発生防止 ・茎数が株当たり二十本程度になったら開始 ◎中干しの実施 ・水管理を効率的かつ効果的に行う ◎作溝の設置	・穂肥の健全化、無効分けつの発生防止 ・茎数が株当たり二十本程度になったら開始 ◎中干しの実施 ・水管理を効率的かつ効果的に行う ◎作溝の設置	・穂肥の健全化、無効分けつの発生防止 ・茎数が株当たり二十本程度になったら開始 ◎中干しの実施 ・水管理を効率的かつ効果的に行う ◎作溝の設置	・穂肥の健全化、無効分けつの発生防止 ・茎数が株当たり二十本程度になったら開始 ◎中干しの実施 ・水管理を効率的かつ効果的に行う ◎作溝の設置	・穂肥の健全化、無効分けつの発生防止 ・茎数が株当たり二十本程度になったら開始 ◎中干しの実施 ・水管理を効率的かつ効果的に行う ◎作溝の設置	・穂肥の健全化、無効分けつの発生防止 ・茎数が株当たり二十本程度になったら開始 ◎中干しの実施 ・水管理を効率的かつ効果的に行う ◎作溝の設置	・穂肥の健全化、無効分けつの発生防止 ・茎数が株当たり二十本程度になったら開始 ◎中干しの実施 ・水管理を効率的かつ効果的に行う ◎作溝の設置	・穂肥の健全化、無効分けつの発生防止 ・茎数が株当たり二十本程度になったら開始 ◎中干しの実施 ・水管理を効率的かつ効果的に行う ◎作溝の設置	・穂肥の健全化、無効分けつの発生防止 ・茎数が株当たり二十本程度になったら開始 ◎中干しの実施 ・水管理を効率的かつ効果的に行う ◎作溝の設置	・穂肥の健全化、無効分けつの発生防止 ・茎数が株当たり二十本程度になったら開始 ◎中干しの実施 ・水管理を効率的かつ効果的に行う ◎作溝の設置
主な病害虫・雑草防除		◎ばか苗病等 ◎もち枯病等 ◎いもち病 ◎種子消毒		◎立枯病 ◎立枯病防除	◎立枯病 ◎立枯病防除	◎立枯病 ◎立枯病防除	◎立枯病 ◎立枯病防除	◎立枯病 ◎立枯病防除	◎立枯病 ◎立枯病防除	◎立枯病 ◎立枯病防除	◎立枯病 ◎立枯病防除	◎立枯病 ◎立枯病防除	◎立枯病 ◎立枯病防除	◎立枯病 ◎立枯病防除	◎立枯病 ◎立枯病防除	◎立枯病 ◎立枯病防除	◎立枯病 ◎立枯病防除	◎立枯病 ◎立枯病防除	◎立枯病 ◎立枯病防除

「きぬむすめ」栽培暦

栽培適地	① 平坦部～中山間部（標高300m以下） ② 早植～普通期栽培（5月移植）に適する。 ③ 多収栽培には土壌が肥沃な地域に適する。										注 意 点	① 過度な多肥栽培は倒伏や屑米の増加が発生するため、適切な肥培管理を行う。 ② いもち病耐病性は強くないため、適切な防除を行う。 ③ 白葉枯病耐病性はやや弱いため、常発地での栽培は避ける。 ④ 刈遅れは穂発芽や胴割米が発生するため、適期刈り取りに留意する。										播付株間・栽種密度 cm・株/m ² 株間 栽種密度 21・15.9								1株種数 本/株	m ² 当種数 本/m ²	1穂粒数 粒/穂	m ² 当粒数 粒/m ²	登熟歩合 %	玄米千粒重 g	収量(精玄米) kg/10a
																						22.0	350	92	32,000	83.0	22.6	600								
月	3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月														
日	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬													
生育ステージ	播種期 出芽期 緑化期 硬化期 田植期 活着期 分げつ期 終有効分げつ期 最高分げつ期 幼穂形成期 出穂期 成熟期																																			
	種子予措			播種			育苗			活着			有効分げつ			無効分げつ			幼穂形成・穂ばらみ			登熟			調製・出荷											
	12cm・2.5葉・3～4本/株			21～23本/株			30～32本/株			30～32本/株			30～32本/株			30～32本/株			30～32本/株			30～32本/株			30～32本/株											
水管理	湛水管理 間断かん水 中干し 走水 間断かん水 湛水管理 落水																																			
主な作業	土づくり 播種 育苗 基肥 育苗箱施肥 田植 除草剤散布 作溝 中干し 中間追肥 穂肥① 穂肥② 病害防除① 病害防除② 落水 収穫 乾燥調製																																			
	浸種水温は10～15℃ 適切な水管理で生育促進 幼穂形成期の葉色は38以上(SPAD値) 防除の徹底 適期刈取																																			
主な管理作業の内容	◎土づくりを心がける ・堆肥等の有機物施用、土づくり肥料の施用 ◎健康な苗づくり ・育苗期間の温度管理、かん水に注意する ・乾粒時20℃前後の薄まき、高密度播種を目標とする ・種子消毒剤は積算温度60℃消毒による種子消毒を行う ◎基肥一発一室素ハ ・基肥一発一室素ハ8kg/10aを目安に（体系施肥） ◎基肥の施用 ・三つ四つ10aを目安に（体系施肥） ◎水管理による初期生育の促進 ・植え付け株数500～600株/坪（株間18～22cm） ・植え付け時期本数五月中旬頃 ◎植付けは適正に！ ・一畝1畝10aを目安に（株間18～22cm） ・健康な苗づくり ・健康な苗づくり ◎除草剤の適期散布 ・雑草の発生状況等をみて、適期に除草剤を散布 ◎活葉後は早めから間断かん水を開始 ・ガレキ抜きと新根の発生を促す ◎中干しの実施 ・根数の健全化、過剰分げつ程度の抑制に努めたら開始 ◎水管理を効果的かつ効果的に行う ・水管理を効果的かつ効果的に行う ◎茎数が少なく葉色がうすい場合は中間追肥を施用 ・茎数が少なく葉色がうすい場合は中間追肥を施用 ◎穂肥の適期適量施用を心がける（体系施肥） ・一回目：施用時期一畝前二日頃（幼穂長2mm） ・二回目：施用時期一畝前二日頃（幼穂長2mm） ◎紋枯いもち防除（穂ばらみ期） ・紋枯いもち防除（穂ばらみ期） ◎カメムシ防除（一回目） ・カメムシ防除（一回目） ◎カメムシ防除（二回目） ・カメムシ防除（二回目） ◎カメムシ防除（三回目） ・カメムシ防除（三回目） ◎早期に完全落水しないこと！ ・出穂後二日頃までは間断かん水をつける ◎適期刈取の実施 ・適期刈取の実施 ◎調製はライスグレーダー網目一・九〇ミリ ・調製はライスグレーダー網目一・九〇ミリ ◎適切な乾燥調製を行うこと ・適切な乾燥調製を行うこと ◎健康な健全化を図る！ ・健康な健全化を図る！																																			
	高密度播種 250g/箱 慣行苗 120g/箱 多収のために追肥をしっかりと！ 中干し期間中は土性により調整する！ 適度な健全化を図る！																																			

「佐香錦」栽培曆

■栽培のポイント

1. 移植時期は5月5日～15日とする。
2. 施肥量はコシヒカリ並みとし、多肥は避ける。
3. いもち病の防除を徹底する。

■特性

【優點】

1. 醸造適性が優れる。
2. 多収である。
3. 千粒重が重い。
4. 品質が良い。

【欠点】

1. 葉いもちにやや弱い。
2. 稈長が長く、倒伏にやや弱い。
3. 耐冷性はやや弱い。

月	4 月				5 月		6 月		7 月			8 月			9 月			10 月											
日	上旬	中旬	下旬		上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬											
生育ステージ	播種期 出芽期 緑化期 硬化期				田植期 活着期		分けつ期	終有効止分けつ期 最高分けつ期	幼穂形成期			出穂期			成熟期														
	種子予備	播種	育苗		活着		有効分けつ		無効分けつ		幼穂形成・穂ばらみ			登熟			調製・出荷												
	12cm・2.5葉・3〜4本/株																			19本/株		24本/株		穂数19本/株					
水管理	湛水管理 間断かん水 中干し 走水 間断かん水 湛水管理 落水																												
主な作業	播種	育苗	基肥	育苗箱施肥	田植	除草剤散布		作溝	中干し		穂肥①	穂肥②	病害防除	虫害防除①	虫害防除②	落水	収穫	乾燥調製	土づくり										
	浸種水温は10〜15℃																			適切な水管理で生育促進				防除の徹底				適期刈取	
主な管理作業の内容	◎健康な苗づくり - 育苗期間の温度管理、かん水に注意する - 乾燥二〇g/箱の薄まき - 浸種時間は積算温度一〇〇℃を目安とする - 種子消毒は、または温湯消毒による種子消毒を行う																												
	◎基肥は控えめに - 有機物多投田では減肥 - 側条施肥なら二・四kg/一〇a以内 - 窒素成分は三kg/一〇a以内 ◎田植は適正に！ - 一植え付け株間は一八cm - 一植え付け株間は三〇〜四本 ◎除草剤の適期散布 - 雑草の発生状況等をみて、適期に除草剤を散布 - 低温や強風時は深水管理 - 浅水管理により地温を高く維持 ◎水管理による初期生育の促進 - 湛水管理は一八cm - 間断かん水を開始 - 中干しの実施 - 根の健全化、過剰分けつの抑制 - 茎数が株当たり一九本以上になったら開始 - 水管理を効果的かつ効果的に行う - 作業溝の設置 ◎穂肥の適期適量施用を心がける（体系施肥） - 一回目：施用時期 出穂前一八日頃（幼穂長八mm） 窒素成分 一・五kg/一〇aを目安に - 二回目：施用時期 出穂前一〇日頃 窒素成分 一・〇kg/一〇a以内 - 減数分裂期が低温の時は深水管理 - 穂いもち防除（出穂前二〜三日） 紋枯病防除（穂ばらみ期） - 一回目：施用時期 出穂前一〇日後頃 カメムシ防除一回目（穂揃い期三日後頃） - 二回目：施用時期 出穂前一〇日後頃 カメムシ防除二回目（一回目の一〇日後頃） ◎仕上げ防除を徹底！ ◎適期刈取りの実施 - 青味利率（一〇〜一五％） - 登熟を促進 - 出穂後二五日頃までは間断かん水をつける ◎早期に完全落水しないこと！ - 適度な間断かん水で根の健全化を図る！ ◎土づくりを心がける - 堆肥等の有機物施用、土づくり肥料の施用 ◎乾燥調製 - 急激な乾燥は避け、ゆっくり乾燥させること - 適正な乾燥は、水分一四〜一五％ - 調製は、イスグレーダー網目二・〇mm使用 ◎適切な乾燥調製を行うこと																												

栽培のポイント

「縁の舞」栽培ごよみ

- ① 移植時期は5月中旬から下旬とする
- ② 稈長が長いので適切な施肥・水管理により倒伏を防ぐ
- ③ いもち病には弱いので箱施薬や本田防除を徹底する
- ④ 穂重型品種のため基肥は控えめにし過剰生育を防ぎ、適切な穂肥施用により玄米の登熟を高める
- ⑤ 標高が低い地域では出穂が早まり、千粒重が低下する傾向がある
- ⑥ 胴割米の発生を防ぐため、土づくり肥料やケイ酸質肥料を必ず施用するとともに刈り遅れしないよう注意する

【長所】

- ① 千粒重が重く大粒である
- ② 「山田錦」より10%程度多収
- ③ 穂発芽・脱粒にくい
- ④ 育苗時の苗立ち・苗揃いが良好
- ⑤ 品質が良く醸造適性も良好
- ⑥ 熟期がやや早く耐冷性が強いいため
山間地での栽培にも適応

【短所】

△生育・収量日増と収量構成要素

[illegible][illegible]

「ヒメノモチ」栽培暦

■栽培適地等

1. 県内全域（特に山間から中山間部の地力中庸地に適する）。
2. 早期栽培に適する。

■長 所

1. 玄米品質が良い。
2. 収量性が高い。
3. 強稈で倒伏にくい。
4. いもち病抵抗性がやや強い。
5. 耐冷性がやや強い。

■注意点

1. 倒伏には強いが極端な多肥栽培は避ける。
2. 出穂が早くカメムシ被害を受けやすいので防除を徹底する。
3. 穂発芽しやすいので適期刈り取りを心がける。
4. 白葉枯病抵抗性が劣るので、常発地での栽培は避ける。
5. うるち品種との識別性に欠けるので混種に注意する。

■収量と収量構成要素の目標値

収量 kg/10a	穂数 本/m ²	粒数 粒/m ²	登熟歩合 %	玄米千粒重 g
540	330～350	28,000～29,000	82	23.0

月	4 月				5 月			6 月			7 月			8 月		9 月			10 月																																																													
日	上旬	中旬	下旬		上旬	中旬	下旬		上旬	中旬	下旬		上旬	中旬	下旬		上旬	中旬	下旬	上旬	中旬																																																											
生育ステージ	播種期				田植期			終有効分げつ期			出穂期			成熟期																																																																		
	播種		育苗		活番		有効分げつ		無効分げつ		幼穂形成・穂ばらみ		登熟		調製・出荷																																																																	
	12cm・2.5葉・3～4本/株				19本/株			24本/株		穂数19本/株																																																																						
水管理	灌水管理 間断かん水 中干し 走水 間断かん水 灌水管理 落水																																																																															
主な作業	播種				育苗		基肥		育苗箱施肥		田植		除草剤散布		作溝		中干し		穂肥①		穂肥②		病害防除		虫害防除①		虫害防除②		落水		収穫		乾燥調製		土づくり																																													
	浸種水温は10～15℃																				適切な水管理で生育促進										防除の徹底										適期刈取																																							
主な管理作業の内容	◎健康な苗づくり ・乾糶期間の温度管理、かん水に注意する ・育苗期間の温度管理、かん水に注意する ・浸種時の温度管理、かん水に注意する ・消毒剤は適量を目安とする ・消毒剤は適量を目安とする ・消毒剤は適量を目安とする																				◎田植は適正に！ ・一畝あたりの本数は18～20本 ・一畝あたりの本数は18～20本 ・一畝あたりの本数は18～20本 ・一畝あたりの本数は18～20本 ・一畝あたりの本数は18～20本										◎中干しの実施 ・根の健全化、過剰分げつの抑制 ・茎の健全化、過剰分げつの抑制 ・茎の健全化、過剰分げつの抑制 ・茎の健全化、過剰分げつの抑制 ・茎の健全化、過剰分げつの抑制										◎穂肥の適期適量施用を心がける（体系施肥） ・一回目... 施用時期 出穂前2～5日頃 ・二回目... 施用時期 出穂前1～5日頃 ・三回目... 施用時期 出穂前1～5日頃 ・四回目... 施用時期 出穂前1～5日頃 ・五回目... 施用時期 出穂前1～5日頃										◎仕上げ防除を徹底！ ・カメムシ防除一回目（穂揃い期三日後頃） ・カメムシ防除二回目（一回目の一〇日後頃） ・カメムシ防除三回目（一回目の一〇日後頃） ・カメムシ防除四回目（一回目の一〇日後頃） ・カメムシ防除五回目（一回目の一〇日後頃）										◎適期刈取の実施 ・登熟後二日頃までは間断かん水を続ける ・登熟後二日頃までは間断かん水を続ける ・登熟後二日頃までは間断かん水を続ける ・登熟後二日頃までは間断かん水を続ける ・登熟後二日頃までは間断かん水を続ける										◎土づくりを心がける ・堆肥等の有機物施用、土づくり肥料の施用 ・堆肥等の有機物施用、土づくり肥料の施用 ・堆肥等の有機物施用、土づくり肥料の施用 ・堆肥等の有機物施用、土づくり肥料の施用 ・堆肥等の有機物施用、土づくり肥料の施用									

「コノエモチ」栽培暦

■栽培適地等

1. 県内全域(特に平坦部から中山間部の地力中庸から肥沃地に適する)
2. 早期栽培に適する

■長所

1. 餅質が良い
2. 収量性が高い
3. 倒伏しにくい
4. 穂発芽しにくい
5. 耐冷性がやや強い
6. 籾の先端が赤褐色で識別性が高い

■注意点

1. 倒伏には強いが極端な多肥栽培は避ける
2. 紋枯病に罹病しやすいため、防除を徹底する
3. 白葉枯病抵抗性がやや劣るので、常発地での栽培は避ける

■収量と収量構成要素の目標値

収量 kg/10a	穂数 本/m ²	籾数 粒/m ²	登熟歩合 %	玄米千粒重 g
540	400～450	29,000～30,000	82	22.5

月	4 月				5 月			6 月			7 月			8 月			9 月			10 月																			
日	上旬		中旬		下旬		上旬		中旬		下旬		上旬		中旬		下旬		上旬		中旬																		
生育ステージ	播種期		出芽期		緑化期		硬化期		田植期		活着期		有効分げつ期		最終分げつ期		幼穂形成期		出穂期		成熟期																		
	種子予備		播種		育苗		活着		有効分げつ		無効分げつ		幼穂形成・穂ばらみ		登熟		調製・出荷																						
	12cm・2.5葉・3～4本/株				22～24本/株				穂数22～24本/株																														
水管理	灌水管理				間断かん水			中干し		走水		間断かん水			灌水管理			落水																					
主な作業	播種		育苗		基肥		育苗箱施肥		田植		除草剤散布		作業		中干		穂肥		穂肥		病害防除																		
	種		苗		肥		箱		植		散		満		し		①		②		除																		
浸種水温は10～15℃																						適切な水管理で生育促進				防除の徹底						適期刈取							
主な管理作業の内容	◎健康な苗づくり				◎基肥は基準量を守る				◎田植後は早期かん水を開始				◎中干しの実施				◎穂肥の適期適量施用を心がける(体系施肥)				◎早期に完全落水しないこと！						◎適期刈取の実施						◎土づくりを心がける						
	・健康な苗づくりのため、浸種・発芽・育苗期間の温度管理、かん水に注意する。				・窒素成分は三〇四 kg / 一〇 a 程度				・活着後は早期かん水を開始し、生育を促進する。				・根の健全化、過剰分げつの抑制につながるため、実施する。				・一回目 施用時期 出穂前二五～二〇日頃 窒素成分 一・五～二 kg / 一〇 a を目安に				・カメムシ防除一回目(穂揃い期三日後頃) 二回目 施用時期 出穂前一五～一〇日頃 窒素成分 一・五～二・〇 kg / 一〇 a						・登熟を促進 出穂後二五日頃までは間断かん水が続ける						・青味初率 (一〇～一五%)						・堆肥等の有機物施用、土づくり肥料の施用

「ミコトモチ」栽培暦

■栽培適地等

1. 標高200m以下の平坦地から中山間地とする。ただし、8月中～下旬の1日の平均気温が20℃を下回る地域では作付を避ける。
2. 日照条件の悪い地域は避ける。
3. 移植時期は5月上～中旬とする。

■長所

1. 餅の外観、食味が良い
2. 粳の先端が褐色で芒がやや長く、識別性が高い。
3. 収量性が高い。

■注意点

1. 葉いもち抵抗性はやや弱いため、適切な防除を行う。
2. 倒伏を防ぐため、多肥栽培はしない。
3. 穂発芽防止のため、適期刈り取りに努める。
4. 胴切米発生防止のため、適地に作付け、移植適期を守る。

■収量と収量構成要素の目標値

収量 kg/10a	穂数 本/m ²	粒数 粒/m ²	登熟歩合 %	玄米千粒重 g
540	390～410	26,000	80	26.0

月	4 月				5 月			6 月			7 月			8 月			9 月			10 月														
日	上旬	中旬	下旬		上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬													
生育ステージ	播種期 出芽期 緑化期 硬化期				田植期 活着期		分げつ期			終有効止分げつ期	最高分げつ期	幼穂形成期	出穂期			成熟期																		
	種子予措		播種		育苗		活着		有効分げつ			無効分げつ		幼穂形成・穂ばらみ			登熟			調製・出荷														
	12cm・2.5葉・3～4本/株				22本/株程度				穂数21～22本/株																									
水管理					湛水管理		間断かん水			中干し		走水		間断かん水			湛水管理			落水														
主な作業	播種		育苗		基肥		育苗箱施肥		田植		除草剤散布		作溝		中干し		穂肥①		穂肥②		病害防除		害虫防除①		害虫防除②		落水		収穫		乾燥調製		土づくり	
	浸種水温は10～15℃				適切な水管理で生育促進								防除の徹底				適期刈取																	
主な管理作業の内容	◎健康な苗づくり ・基肥は成分を4kg/10a程度 ・乾糞は10g/10a程度 ・浸種は20℃を目安とする ・消毒は20℃を目安とする ・健康な苗づくり				◎水管理 ・浅水温や強風時は、深水を高く維持 ・水管理は、初期生育の促進 ・水管理は、初期生育の促進				◎中干しの実施 ・茎の健全化、過剰分げつの抑制 ・中干しの実施				◎穂肥の適期適量施用を心がける（体系施肥） 一回目：施用時期は出穂前20日頃 二回目：施用時期は出穂前15～20日頃 三回目：施用時期は出穂前10～15日頃				◎仕上げ防除を徹底！ ・カメムシ防除（一回目：穂揃期三日後頃） ・カメムシ防除（二回目：一回目の10日後頃）				◎早期に完全落水しないこと！ ・登熟を促進 ・出穂後二五日頃までは間断かん水を続ける 適度な間断かん水で根の健全化を図る！				◎適切な乾燥調製を行うこと ・急激な乾燥は避け、ゆっくり乾燥させること ・調製はライスグレーダー（網目2mm）を使用				◎土づくりを心がける ・堆肥等の有機物施用、土づくり肥料の施用					

ポイント	1. 優良品種の選定 2. 排水対策と土づくり 3. 適期播種と栽植密度の確保 4. 適切な施肥 5. 適期収穫
------	--

小麦栽培ごよみ

目標	水分 12.5%以下 整粒歩合 80%以上の良質小麦生産
----	---------------------------------

生育ステージ																											
月	10 月			11 月			12 月			1 月			2 月			3 月			4 月			5 月			6 月		
旬	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
栽培管理	播種期 出芽期 分げっ期 幼穂形成期 茎立期 出穂期 成熟期																										
技術の内容（資材は一〇アール当り）	10 月 上旬 土作り、ほ場選定 10 月 中旬 種子消毒、作溝 10 月 下旬 基肥 11 月 上旬 播種、耕起、碎土 11 月 中旬 除草剤散布 11 月 下旬 追肥 12 月 上旬 穂肥 12 月 中旬 追肥 12 月 下旬 追肥 1 月 上旬 追肥 1 月 中旬 追肥 1 月 下旬 追肥 2 月 上旬 追肥 2 月 中旬 追肥 2 月 下旬 追肥 3 月 上旬 追肥 3 月 中旬 追肥 3 月 下旬 追肥 4 月 上旬 追肥 4 月 中旬 追肥 4 月 下旬 追肥 5 月 上旬 追肥 5 月 中旬 追肥 5 月 下旬 追肥 6 月 上旬 追肥 6 月 中旬 追肥 6 月 下旬 追肥																										

ポイント	1	排水対策と土づくり
	2	適期播種（11月上旬）
	3	適切な施肥と赤かび病防除
	4	適期収穫（梅雨入り前）

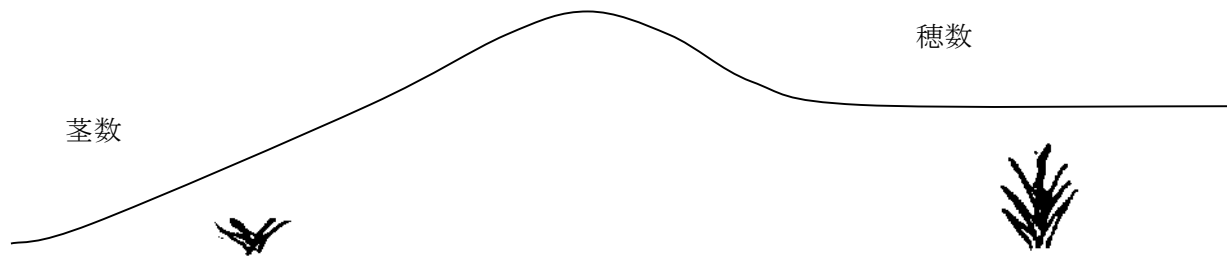
小麦「ミナミノカオリ」

栽培ごよみ

利 点	○稈長が短く倒伏しにくい ○成熟期が農林 61 号より 3 日程度早い
欠 点	○穂発芽の恐れがある ○赤かび病にやや弱い

☆穂発芽性がやや易で、赤かび病にやや弱いため、梅雨入り前の収穫を目指します。

☆このため播種期は 11 月上旬とし、播種作業が遅れないようにしましょう。

生育 ステージ	茎数 穂数 																																														
	10 月			11 月			12 月			1 月			2 月			3 月			4 月			5 月			6 月																						
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下																				
栽培 管理	ほ場選定 土作り 作溝 種子消毒			基肥 耕起 砕土 播種 除草剤散布			除草剤散布			追肥			穂肥			実肥 病虫害防除			成熟期 収穫 乾燥・調製																												
技術の内容 (資材は一〇アール当り)	排水溝深さ二〇〜三〇cm、五mおき 種子消毒薬剤による浸漬、粉衣または吹き付け処理を行う 苦土石灰一〇〇〜二〇〇kg等、完熟堆肥二〜三t 排水のよい圃場を選ぶ。			窒素六〜八kg、磷酸八〜一〇kg、カリ八kg 耕起はできるだけ深く、砕土は丁寧に行う。 播種期は十一月月上旬、ドリル播きでは播種量八〜一〇kg 播種後に除草剤を土壌処理する。			広葉雑草等が多い場合には、除草剤を茎葉処理する。 窒素二〜三kg			窒素一〜二kg、カリ二kg			赤かび病防除のため、穂揃期に必ず薬剤散布を行う。 出穂十日後に窒素三〜四kg			成熟期に降雨が続くと穂発芽しやすいので注意！ 成熟期から二日後以降、穀粒水分三〇％以下で速やかに収穫 穂首が黄化し、粒がろう状の硬さに達したときが成熟期			篩目二・二mm、整粒歩合八〇％以上、水分二・五％以下																												
小麦栽培の成功のカギは排水対策・ほ場の周囲とほ場内 5 m間隔の明渠																																															
播種が遅れないこと																																															

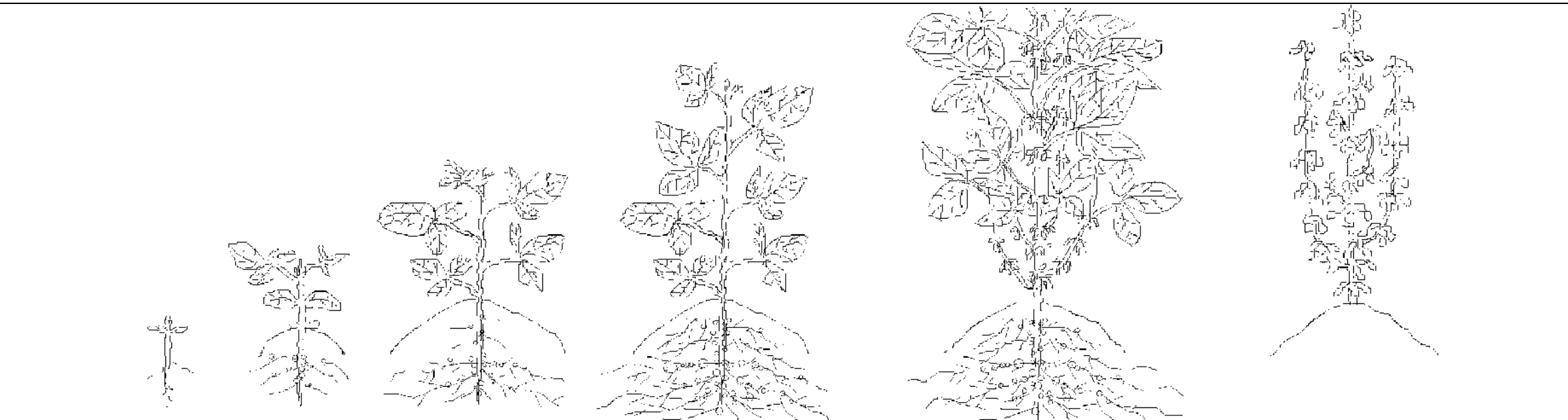
ポイント	1. 優良品種の選定 2. 排水対策と土づくり 3. 適期播種と栽植密度の確保 4. 適切な施肥 5. 適期収穫
------	--

ビール大麦栽培ごよみ

目標	発芽勢 98%以上 粗蛋白含量 10～11%の範囲内 水分 13%以下 2.5mm 以上の粒が 95%以上
----	--

生育ステージ	穂数 茎数  播種期 出芽期 分げっ期 幼穂形成期 茎立期 出穂期 成熟期   																													
	月	10 月			11 月			12 月			1 月			2 月			3 月			4 月			5 月			6 月				
旬	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下			
栽培管理	ほ場選定 土作り 作溝 種子消毒			基肥 播種 耕起砕土			除草剤散布			追肥			穂肥			病害虫防除			病害虫防除			成熟期 収穫 乾燥・調整								
技術の内容(資材は一〇アル当り)	排水のよい圃場を選ぶ。 苦土石灰一五〇〜二〇〇kg等、完熟堆肥二〜三t			種子消毒薬剤による浸漬、粉衣または吹き付け処理を行う。 排水溝深さ二〇〜三〇cm、五mおき			窒素六〜八kg、磷酸八〜一〇kg、カリ八kg			播種後に除草剤を土壌処理する。 平坦部十一月上〜中旬、ドリル播きでは八〜一〇kg 耕起はできるだけ深く、砕土は丁寧に行う。			窒素二〜三kg			窒素一〜二kg、カリ二kg			赤かび病防除のため、必ず薬剤散布を行う。			赤かび病防除のため、必ず薬剤散布を行う。			穂首が黄化し、粒がろう状の硬さに達したときが成熟期			篩目二・五㎢、整粒歩合九五%以上、水分一三%以下 穀粒水分二五%以下(穂首湾曲七〜八割)で収穫		

大豆栽培ごよみ

生育ステージ																											
	播種期			出芽期			第2本葉期			第5本葉期			開花期			幼莢期			子実肥大期			落葉期			成熟期		
月	6月			7月			8月			9月			10月			11月											
旬	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
栽培管理	除草剤散布 耕起播種 基肥 種子準備 土壌改良 排水対策			中耕培土			中耕培土			畦間灌水 害虫防除 畦間灌水			紫斑病防除 害虫防除 紫斑病防除			害虫防除			収穫 乾燥 調製								
	播種直後に除草剤を土壌処理する 耕起・播種はできるだけ同じ日に行う 窒素2・リン酸8・カリ8kg/10a 紫斑・褐斑粒等を除き種子消毒する 苦土石灰100～150kg等 補助暗きよ・明きよの施工			第2本葉展開期に子葉節まで行う			第5本葉展開期に第1本葉節まで行う			開花後土が極端に乾く場合は灌水する 害虫の発生状況により適宜行う			開花30日後害虫防除を兼ねて行う 開花40日後害虫防除を兼ねて行う			害虫の発生状況により適宜行う			火力乾燥は子実水分30%以下で行う コンバインは茎水分40%以下が適期								
ポイント	栽植密度は播種期で調整 基盤整備排水基準値参照									幼莢期は最も水が必要 カメムシ類			カメムシ類 ハスモンヨトウ						粒度70%以上 目標整粒歩合85%以上 送風温度は35℃以下 汚損粒の防止								